

# 京都府下農村の都市への依存関係

長谷川 昭彦

## I はじめに

現在の日本の農村は種々の面で大なる変貌をとげつつある。その変貌の1として市町村合併促進法による新市町村が誕生し、新しい市町村域には都市部をはじめ、莫大な農村部をも包含していることが挙げられるであろう。この事は、直接にはあまり関係がないと思われる地域まで市町村域に包含しているかもしれないが、しかし、農村の人々の生活圏を拡大せしめ、中心都市との連関性を益々高め、大なる社会的統一体が出現しつつあることを意味している。かくして、農村社会における諸問題は単に農村それ自体の内部の問題として把握されるべきであるのみならず、外部の社会、特に都市との連関の下に把握されなければならないであろう<sup>1)</sup>。本稿は農村の都市への関連性を何らかの仕方<sup>2)</sup>で把握したいという意図のもとに企てられた。

1) 都市と農村とを関連せしめた考え方にはアメリカにおいては有名な *rurban community* (都鄙共同体) という考えが早くからあった。また鈴木栄太郎「都市社会学原理」(昭32)においては都市と村落を聚落社会と呼び、都市を社会的文化的交流の結節であるとした考えは本稿の有力な支柱となった。

農村と都市の関連又は社会的交流には各種のものが考えられる<sup>2)</sup>。しかし、本稿においては農村の人々が最も普通一般に都市に依存し、また都市を利用するもののうちで、買物と娯楽の面だけを取り上げて、農村の都市依存関係を京都府の場合を例として考察して行きたい<sup>3)</sup>。そして、具体的には買物においては衣類と家具類を買いに行くところ、娯楽においては映画演劇を見に行くところを京都府下の各農村部落の区長又は農家実行組合長に郵送法によって質問し回答を求めた<sup>4)</sup>。本稿はこの調査の集計の結果である。

2) 社会的交流の結節は統治、教育、経済等の各種にわたっているとして鈴木は販売・技術・教育・信仰娯楽の諸機関をあげている(鈴木、前掲書 56—58, 65—66頁)。

3) 都市を利用し、都市に依存するという意味では都市のもつ購買圏とサービス圏を考えなければならないであろう。購買圏といっても品物によってかなり性格が異ってくる。最寄品は消費者の居住地の近くで購買し、買廻品は遠距離でも商店の充実した中心に依存する(木地節郎「商圈の研究法」藤岡謙二郎編「人文地理学研究法」223頁以下、また磯村英一「都市社会学研究」昭34, 123頁以下)。従って品物のうちで特に衣類と家具類とは都市へ買いに行く機会が多いと考えて衣類と家具類を買いに行くところを尋ねた。また、サービス圏としては医療・娯楽等が考えられるのであるが、このうち最も普通に都市に依存するものとして映画・演劇を挙げてみた。

4) 調査の方法をもう少し詳細に述べるならば、京都府下の農業集落は約1800あるが、このうち市街地農村、農家組合や実行組合のない集落を除外して母集団とした。第1次の調査として、農家経営技術の改良普及に関する調査を $\frac{1}{2}$ のサンプルをとり、市町村役場を運営して区長又は組合長に配布してもらい約460通の回答をえた。この結果に関してはまた他の機会に発表したい。この回答をえられた部落に対して再度、この調査の質問の回答を往復葉書によって求めた。第1次調査で回答をえられなかった部落を

除外したのは再度質問を送っても回答がえられないのではないかというおそれと、経費の都合とによって。この質問発送がこのように二重のフィルターを通過しているため、回答にはかなりのサンプルのかたよりがあることは否めない。回答は結局335通をえた。

質問を更に具体的に示すと、

部落の人々は衣類や家具類を普通どこへ買いに行きますか。また映画や演劇はどこへ見に行きますか。またそこへ行くのに普通の方法で何分かかりますか。(次表に町名と時間とを入れて下さい)

	買物に行くところ	その時間	映画・演劇を見に行くところ	その時間
主に行くところ		分		分
次に行くところ		分		分

## II 各市区町村の依存中心

各農村部落はそれぞれの買物やサービスの依存中心<sup>5)</sup>をもっている。この中心はその部落の属する市区町村内にある場合もあろうし、市町村域を超えたところにある場合もあろう。附近に大都市の存在する場合、小都市しか存在しない場合、又は遠くにしか都市がない場合とそれぞれ依存の仕方は異なるであろう。京都府の場合においては京都市という人口100万を超す大都市があり、また福知山・舞鶴・綾部等の10万内外の地方小都市もあり、農村部落の都市への依存の仕方にはかなりのバリエーションが存することは当然予想されるのである。それでは実際に、各行政市町村に属する農村部落は京都府においてはどのように依存中心をもっているのだろうか。各市町村別に依存中心を次に求めて見よう。

5) 依存中心というのは依存関係の焦点という意味である。ホーレイの community center——コミュニティの地域的組織における焦点で、相互依存性が統合され管理されている——を参照した (A. H. Hawley, Human Ecology, 1950, p. 238)。

ここで、衣類・家具類を購入するところを仮りに買物中心と名づけ、映画・演劇を見に行くところを仮りに観劇中心と名づけ、また、主に行くところを主中心、次に行くところを副中心と呼び、買物・観劇の両者を含めて依存中心という名を与えることにする。そして、調査の結果としてあらわれた依存度を量的にとらえるために、便宜的に次の表のような依存度の値を与えよう。<sup>6)</sup>

6) この依存度の数値の配分は全く筆者の勝手によってあたえたもので特別の意味はもたない。ただ総点が10になるように配分することが計算の上で便利であろうという点と、農村においては買物の方が観劇よりも都市への依存度は若干重いのではなかろうかという臆測から便宜的に、仮りに与えたものに過ぎない。次に依存度の値を計算するについて主中心の欄にのみ記入して副中心欄に記入してい

	買物中心	観劇中心
主中心	4	3
副中心	2	1

依存度の値の配分

いものは主中心と副中心とが重なるとみなし、一欄に2ヶ所以上記入したものはそれぞれ依存度を計算した。また買物において、農協、行商人等から購入したり、他部と関係のない自部落の商店で購入すると回答したものは地元という形で表わし、また観劇においても公民館、学校等で巡回映画・団体主催の映画を見るときに記入したのもやはり地元という形で表わした。なお各市町村における各中心への依存度の合計の割合をパーセントで示したものを依存率と呼ぶことにする。

以下各市区町村別の依存中心とそれへの依存度を具体的に述べて行こう。

京都府下農村の都市への依存関係

各市区町村名	依存中心	依存部 落数	依存度 の計	依存率 %
京都市				
左京区	京都	4	32	80.0
	地元	2	8	20.0
		4	40	100.0
東山区	京都	4	22	55.0
	山科	4	17	42.5
	大津	1	1	2.5
		4	40	100.0
南区	京都	4	32	80.0
	向日町	2	4	10.0
	地元	1	4	10.0
		4	40	100.0
右京区	京都	7	51	72.9
	向日町	3	10	14.3
	高槻	1	5	7.1
	桂	1	4	5.7
		7	70	100.0
伏見区	伏見	3	16	53.3
	京都	3	10	33.3
	淀	1	4	13.3
		3	30	99.9
京都市全体	京都	22	147	66.8
	山科	4	17	7.7
	伏見	3	16	7.3
	向日町	5	14	6.4
	高槻	1	5	2.3
	桂	1	4	1.8
	淀	1	4	1.8
	大津	1	1	0.5
	地元	3	12	5.5
		22	220	100.1
宇治市	宇治	3	13	47.4
	伏見	3	12	31.6
	京都	3	5	13.1
	大津	1	3	7.9
		3	38	100.0
久世郡 城陽町	伏見	6	34	44.2
	京都	7	21	27.3
	寺田	3	10	13.0
	宇治	2	8	10.4
	長池	1	4	5.2
		7	77	100.1

左京区では買物中心に地元があげられているほかは全く京都へ依存している。

東山区では京都と並んで山科への依存が大となっているが、京都への依存は第1位である。

南区では買物の副中心として向日町が出て来るが、京都への依存が圧倒的に大である。

右京区では買物中心として向日町に依存する部落があるほか高槻・桂という小中心もある。京都への依存は甚だ大である。

伏見区では伏見が依存の主中心となり、京都の影響は少ない。淀という小中心もある。

京都市全体をとると、京都が最大の依存中心をなしているのは当然として、山科・伏見向日町のような小さな副中心の存在も見のがせない。

宇治市では宇治が最大の中心とはなっているが、伏見への依存もかなり大である。また京都も観劇の面でかなり影響を及ぼす。

城陽町の依存の主中心は伏見である。京都は買物の副中心、観劇の主副中心としての依存性がかなり強い。町内の寺田は買物中心として、その他宇治、長池への依存も見られる。

人 文 学 報

久御山町	伏見	4	24	60.0
	京都	4	10	25.0
	淀	1	4	10.0
	地元	1	2	5.0
		4	40	100.0
乙訓郡				
向日町	京都	1	8	80.0
	向日町	1	2	20.0
		2	10	100.0
長岡町	京都	4	25	59.5
	向日町	3	8	19.0
	長岡町	1	2	4.8
	伏見	1	2	4.8
	大阪	1	1	2.4
地元	1	4	9.5	
		4	42	100.0
綴喜郡				
八幡町	伏見	4	23	57.5
	京都	3	13	32.5
	八幡	1	4	10.0
		4	40	100.0
田辺町	京都	6	32	43.3
	伏見	5	14	18.9
	田辺	3	12	16.2
	大阪	2	8	10.8
	奈良	2	4	5.4
	井手	1	4	5.4
		6	74	100.0
井手町	京都	3	13	43.3
	井手	3	12	40.0
	奈良	3	5	16.7
		3	30	100.0
宇治田原町	伏見	1	5	50.0
	宇治	1	3	30.0
	京都	1	2	20.0
		1	10	100.0
相楽郡				
山城町	井手	2	8	40.0
	京都	2	6	30.0
	奈良	2	6	30.0
		2	20	100.0
木津町	奈良	2	14	58.3
	木津	2	8	33.3
	京都	1	1	4.2

久御山町では伏見の依存性が非常に大である。京都にも副中心としての依存性が強い。淀への買物の依存性もある。

向日町は京都への依存性が甚だ大で、買物の副中心として向日町がある。

長岡町は向日町より京都から遠くなり、京都への依存率は低くなる。京都への依存はかなり高いとはいえ、向日町、伏見、長岡等の依存があり、観劇では大阪の影響も入っている。

八幡町の依存中心は第1に伏見、次に京都である。八幡への依存もある。

田辺町になると再び京都と伏見の立場が逆転し、京都への依存性が大となる。地元の田辺での買物も多く、大阪・奈良の影響もかなり出てくる。

井手町においては買物の副中心、観劇の主中心が京都であるが、買物の主中心は井手で、京都と匹敵する力をもつ。奈良の勢力もかなりある。

宇治田原町では伏見・宇治・京都の順に依存している。

山城町では買物の主中心は井手、観劇の主中心は奈良と分れており、京都は両者の副中心となっている。

木津町の依存中心は奈良で木津にもかなりの依存が見られる。京都・大阪にも僅かに依

京都府下農村の都市への依存関係

	大 阪	1	1	4.2	存する。
		2	24		
加茂町	加 茂	4	20	43.5	加茂町では町内の加茂への依存が大である。同時に奈良への依存もかなり大きく、京都・大阪への結びつきもある。
	奈 良	4	18	39.1	
	京 都	2	4	8.7	
	大 阪	2	4	8.7	
		4	46	100.0	
笠置町	奈 良	1	5	35.7	笠置町では奈良・笠置・加茂への依存がほぼ同程度ずつ見られ、大阪へも僅かながら依存する。
	笠 置	1	4	28.6	
	加 茂	1	4	28.6	
	大 阪	1	1	7.1	
		1	14	100.0	
和束町	奈 良	4	28	63.6	和束町の依存の主中心は奈良で、依存度はかなり強い。和束が買物の副中心、信楽が観劇の副中心としての性格が強い。京都・大阪の影響も見られる。
	和 束	3	6	13.6	
	京 都	1	5	11.4	
	信 楽	3	3	6.8	
	大 阪	1	2	4.5	
		4	44	99.1	
精華町	奈 良	5	21	35.0	精華町では比較的奈良・京都への依存が強いが、集中的な中心がないといわねばならぬだろう。
	京 都	5	17	28.4	
	大 阪	2	6	10.0	
	田 辺	1	4	6.7	
	伏 見	1	4	6.7	
	木 津	1	4	6.7	
	井 手	1	2	3.3	
	地 元	1	2	3.3	
		5	60	100.1	
南山城村	奈 良	7	33	43.4	南山城村では奈良と上野とにほぼ同じ程度の依存中心が見出される。
	上 野	6	32	42.1	
	大 阪	2	4	5.3	
	加 茂	1	4	5.3	
	京 都	2	3	3.9	
		7	76	100.0	
亀岡市	亀 岡	7	41	45.6	亀岡市では亀岡への依存率が最も高く、亀岡が依存の主中心となっているが、京都への依存もかなり高い。この外八木園部への依存の大なる部落もあり、大阪・池田の結びつきも僅かではあるが存在する。
	京 都	7	26	28.9	
	八 木	2	14	15.6	
	園 部	2	6	6.7	
	池 田	1	2	2.2	
	大 阪	1	1	1.1	
	9	90	100.1		
北桑田郡 京北町	周 山	10	52	37.7	京北町では周山・京都への依存が比較的高いとはいえ、地元への依存率がかなり高い点は交通の不便な山村の多いことを示す。
	京 都	9	48	34.8	
	矢 代	1	7	5.1	
	殿 田	1	2	1.5	

人 文 学 報

	地 元	5	29	21.0
		13	138	100.1
美山町	京 都	5	24	26.7
	空 島	1	7	7.8
	綾 部	2	5	5.6
	平 屋	1	4	4.4
	中	1	4	4.4
	安 掛	1	2	2.2
	地 元	5	44	48.9
		7	90	100.0
船井郡				
園部町	園 部	6	46	76.7
	京 都	3	9	15.0
	八 木	1	3	5.0
	亀 岡	1	2	3.3
		6	60	100.0
八木町	八 木	3	24	80.0
	園 部	1	3	10.0
	京 都	1	3	10.0
		3	30	100.0
丹波町	園 部	4	24	48.0
	須 知	4	18	36.0
	京 都	4	8	16.0
		5	50	100.0
日吉町	園 部	4	26	60.5
	京 都	4	13	30.2
	周 山	1	3	7.0
	地 元	1	1	2.4
		4	43	100.1
瑞穂町	園 部	5	11	13.6
	京 都	4	9	11.1
	檜 山	2	9	11.1
	下 山	3	8	9.9
	地 元	5	44	54.3
		8	81	100.0
和知町	綾 部	4	19	38.0
	和 知	4	18	36.0
	福知山	1	2	4.0
	地 元	2	11	22.0
		5	50	100.0
綾部市	綾 部	27	160	56.1
	福知山	12	31	10.9
	志賀郷	3	18	6.3
	舞 鶴	4	11	3.9

美山町においてはまとまった依存中心としては京都しかなく、それ以外には集中的に頼るべき中心がない。地元への依存率が非常に高い点はこれを裏付けてくれる。

園部町では同じ町内の園部に集中的に依存している。園部以外には京都更に八木、亀岡に僅かな依存が見られる。

八木町も八木に集中的に依存している。その他に園部・京都が見られる。

丹波町では同じ町内の須知よりもむしろ園部へ依存する傾向が強い。京都への依存もかなりある。

日吉町は同じ町内に依存すべき中心がない。園部が最も大で次に京都があり、周山も僅かに見られる。

瑞穂町は全く依存すべき集中的な中心をもたない。地元への依存率は府下最高である。従って園部・京都への依存も僅かに存し、町内の檜山・下山へも僅かに依存する。

和知町はむしろ綾部の勢力圏内にあり、同町内の和知への依存率を凌いでいる。しかしそれらも決定的なものでないことは地元への依存率が高いことが示す。福知山への結びつきが僅かに見られる。

綾部市は綾部という集中的な中心をもっている。市外では福知山の勢力が若干伸びて来ており、舞鶴・京都の力も僅かながら及んで

京都府下農村の都市への依存関係

	京 都	3	5	1.8
	十 倉	1	4	1.4
	中上林	1	4	1.4
	梅 迫	1	2	0.7
	上 杉	1	2	0.7
	地 元	8	48	16.8
		27	285	100.0
福知山市	福知山	25	187	74.0
	京 都	3	8	3.2
	河 守	2	4	1.6
	石 原	1	2	0.8
	野 花	1	2	0.8
	大 阪	1	2	0.8
	地 元	14	48	18.9
		25	253	100.1
天田郡 三和町	三 和	3	19	47.5
	福知山	4	18	45.0
	綾 部	1	3	7.5
		4	40	100.0
夜久野町	福知山	8	48	60.0
	額 田	3	13	16.3
	梁 瀬	5	11	13.7
	上夜久野	2	6	7.5
	和田山	1	2	2.5
		8	80	100.0
加佐郡 大江町	河 守	13	83	61.9
	福知山	12	37	27.6
	南有路	2	10	7.5
	外 宮	1	4	3.0
		13	134	100.0
舞鶴市	東舞鶴	13	72	20.4
	西舞鶴	18	114	32.3
	舞 鶴	16	115	32.6
	舞鶴全体	35	301	85.3
	宮 津	3	12	3.4
	岡田上	2	9	2.6
	平	1	5	1.4
	河 守	2	4	1.1
	森 口	1	3	0.9
	京 都	1	3	0.9
	地 元	6	16	4.5
		35	353	100.1

いる。市内には志賀郷という小中心があり、更に何箇所かの1部落のみの依存する中心がある。

福知山市内の農村は非常に集中的に福知山に依存している。特に市外の中心の影響が京都・河守・大阪で併せて依存率6%に満たないわけで極度に少ない。特に隣の綾部の力が全くないのは注目すべきだ。

三和町では三和と福知山がほぼ同程度で依存中心を分け合っている。綾部へも若干依存が見られる。

夜久野町の主な依存中心は福知山である。この外に町内の額田、上夜久野への若干の依存が見られ、兵庫県の梁瀬、和田山へも依存関係が見られる。

大江町の主な依存中心は同じ町内の河守である。次の中心として福知山がある。

舞鶴市は東舞鶴と西舞鶴という2の核をもっている。東・西両舞鶴を区別し又は区別せずに記入した例をそのまま集計すると上欄の如くである。

舞鶴市の舞鶴（東・西を併せた）への依存率は極度に高い。そして反面、市外の中心（宮津・河守・京都）への依存も極度に低い（依存率の計5.4%）。舞鶴は舞鶴でという一種のメンロー主義的なものが感ぜられる。

人 文 学 報

宮津市	宮津	9	48	46.6
	由良	2	14	13.6
	上司	2	12	11.6
	須津	1	7	6.8
	舞鶴	2	6	5.8
	養老	1	4	3.9
	岩滝	1	1	1.0
	地元	2	11	10.7
		10	103	100.0

宮津市の依存の主中心としては宮津があるが、その力は比較的弱い。そして、由良・上司・須津・養老というような他の小中心が数多くあられ、市外の舞鶴・岩滝の影響も少しある。

与謝郡				
加悦町	加悦	5	40	80.0
	野田川	2	6	12.0
	口滝	2	4	8.0
		5	50	100.0

加悦町は加悦に依存することが甚だ大であるが、野田川を副中心としている。

野田川町	野田川	6	40	66.7
	加悦	2	5	8.3
	宮津	1	2	3.3
	地元	4	6	21.7
		6	60	100.0

野田川町は野田川に主に依存し、加悦・宮津にも僅かに依存する。

岩滝町	岩滝	1	7	70.0
	宮津	1	3	30.0
		1	10	100.0

岩滝町は岩滝に主として依存し、宮津を従としている。

伊根町	宮津	7	28	30.4
	平田	1	8	8.7
	本庄宇治	1	7	7.6
	滝根	1	3	3.3
	地元	6	46	50.0
		9	92	100.0

伊根町は宮津を依存の主中心とはしているが、その力は非常に弱い。地元依存率が極めて大であって、集中的依存中心をもっていないく、各地に分散的な依存をしている。

中 郡				
峰山町	峰山	6	49	79.0
	豊岡	2	4	6.5
	京都	1	2	3.2
	宮津	1	2	3.2
	溝谷	1	2	3.2
	地元	2	3	4.8
		6	62	99.9

峰山町は町内の峰山に殆ど全ての依存中心を見出す。その他には豊岡・京都・宮津・溝谷等の中心があるが、これらの力は非常に弱い。

大宮町	口大野	1	7	70.0
	峰山	1	3	30.0
		1	10	100.0

大宮町では口大野が主な中心、峰山が副中心となっている。

竹野郡				
丹後町	間人	10	60	57.7
	中浜	3	10	9.6
	是安	2	8	7.7
	峰山	3	8	7.7
	久僧	3	7	6.7
	平	1	5	4.8

丹後町は間人を主な依存の中心としている。これ以外に数多くの小さな中心が存在する。



京都府下農村の都市への依存関係

	宇川	1	1	1.0	
	地元	2	5	4.8	
		10	104	100.0	
弥栄町	溝谷	6	30	50.0	弥栄町では溝谷という中心をもっている。 これと並んで峰山の影響も非常に大である。
	峰山	6	22	36.7	
	黒部	1	2	3.3	
	網野	1	1	1.7	
	地元	2	5	8.3	
		6	60	100.0	
網野町	網野	5	23	46.0	網野町の中心は網野であるが、豊岡・浜詰、 それに峰山にもかなりの程度依存している。
	豊岡	3	11	22.0	
	浜詰	3	10	20.0	
	峰山	2	6	12.0	
		5	50	100.0	
熊野郡					
久美浜町	久美浜	11	56	34.0	久美浜町においては、久美浜とそれに次い で野中という中心が並立している。また豊岡 の勢力もかなり伸びて来ている。
	野中	8	44	26.7	
	豊岡	13	34	20.6	
	友重	2	6	3.6	
	峯山	3	6	3.6	
	湊	1	5	3.0	
	芦原	1	2	1.2	
	地元	3	12	7.3	
			16	165	

### Ⅲ 各都市の勢力圏

次に、依存中心から見て各中心がどの範囲のそしてどの程度の力をもって農村部落から依存されるかということすなわち各都市が買物や観劇に関してどの範囲のそしてどの程度の農村を勢力圏<sup>7)</sup>の傘下に包摂しているかという問題を考察したい。都市の勢力圏というのは一般的にを  
 そいえば自らの都市それ自体を勢力圏に含んでいるのはいうまでもないが、同時に周囲の農村部をも勢力圏に入れている。そしてその範囲や程度は中心となる都市の規模（人口の大きさや商店サービス機関の質や量）によって規定されるし、周囲の農村地域に至る交通の便（時間的・費用的距離）に依存している。そしてまた他の同程度の都市や上級、下級の都市との関連や影響によっても異ってくる。かくして、都市は周囲の農村と関連し合って主たる中心となる都市、従たる中心となる都市とその周縁の農村を含めた広域の社会的統一体として地域が考えられるのである。かくて都市の勢力圏を考察することによって、都市と都市との相互関連、都市勢力圏の境界や交錯の状態、そして上級都市と下級都市というような各都市のランキングも可能になってくるのである。

7) 鈴木栄太郎によれば都市の外周には次の5の社会圏がとりまいている、即ち都市生活圏、都市依存圏、都市利用圏、都市支配圏、都市勢力圏である（鈴木、前掲書、365頁以下）。そして勢力圏というのは鈴木によればマス・コミュニケーション可能の地域に用いられている。従ってここで用いた勢力圏という用語はむしろ都市利用圏に近い。しかし本稿では買物や観劇という面に関して、都市の勢力が周囲に及

び、農村はその力に依存するものであると考えて、敢えて勢力圏という言葉を用いた。

8) 都市と農村とが全く対立するものでなく、連続体をなすものであるという都鄙連続体 (the rural-urban continuum) の概念については処々で議論のあるところである (E. M. Rogers, Social Change in Rural Society, 1960, p. 136.)。またホーレイの依存コミュニティの概念 (Hawley, 前掲書, p. 222 以下) やレッドフィールドのコミュニティの中のコミュニティという考え方 (R. Redfield, The little Community, 1956, p. 113 以下) を参照。

京都府下の主要都市の勢力圏即ち依存中心としての都市の、その勢力圏に包含する行政市町村における農村部落の範囲と程度とを以下述べてみよう。

先ず京都は次の表の示すごとく、京都市内の農村、乙訓郡 (向日町、長岡町) の農村をしっかりと把握しているのみでなく、南山城地区から口丹波地区にかけての莫大な勢力圏を構成している。

中心	依 存 率								
	80%台	70%	60%	50%	40%	30%	20%	10%	10%以下
京 都	左京区 南区 向日町	右京区		東山区 長岡町	田辺町 井手町	伏見区 八幡町 山城町 京北町 日吉町	城陽町 久御山町 宇治田原町 精華町 美山町 亀岡市	宇治市 和束町 園部町 八木町 丹波町 瑞穂町	木津町 加茂町 南山城村 綾部市 福知山市 舞鶴市 峰山町

京都と競合する勢力圏を形成しているのは伏見である。しかし伏見の勢力圏はその周辺を併せてかなり大ではあるが京都に比すると著しく限定され京都の従属的な勢力圏の性格を脱しない。

中心		60%	50%	40%	30%		10%	10%以下
伏 見		久御山町	伏見区 八幡町 宇治田原町	城陽町	宇治市		田辺町	長岡町 精華町

奈良の勢力圏は京都や伏見の及びえない南山城地区に伸びている。

中心		60%	50%	40%	30%		10%	10%以下
奈 良		和束町	木津町	南山城村	山城町 加茂町 精華町 笠置町		井手町	田辺町

福知山の勢力圏は福知山市と夜久野町をしっかりと把握しているほか、三和町・大江町をはじめ奥丹波一帯に強大な勢力圏を形成している。

福 知 山	70%	60%	40%	20%	10%	10以下
	福知山市	夜久野町	三和町	大江町	綾部市	和知町

京都府下農村の都市への依存関係

福知山の勢力圏と競合関係にあるのは綾部であるが、福知山に比してかなり劣勢なのは福知山市内を全く勢力圏に入れていないことによってもわかる。<sup>9)</sup>

9) 福知山と綾部との商圏の競合関係については木地節郎「市界を接する地方2都市間の商圏競合——福知山市と綾部市の商圏関係を例にとって」地理学評論第31巻第5号、1958。日本地理学会参照。

綾 部	60%	30%	10%以下	河 守	60%	10%以下
	綾部市	和知町	美山町 三和町		大江町	福知山市 舞鶴市

河守は福知山勢力圏の内の一角たる大江町のみをほぼ完全に把握している。

京都と福知山の間に挟まれながら、しかもかなりの勢力を誇っているのが園部である。園部は船井郡一带を勢力圏として

園 部	70%	60%	40%	10%	10%以下
	園部町	日吉町	丹波町	瑞穂町 八木町	亀岡町

京都・園部・福知山の各勢力圏に介在して、あまり大とはいえないが着実に勢力を張っているのが亀岡・八木・周山である。

中 心	80%	40%	30%	10%	10%以下
亀 岡		亀岡市			園部町
八 木	八木町			亀岡市	園部町
周 山			京北町		日吉町

舞鶴の勢力圏はかなり強大ではあるが、舞鶴市内のみは殆ど完全に掌握しているが、他の市町村には殆ど影響を与えていない。いわば独立独歩型である。

舞 鶴	80%	10%以下
	舞鶴市	綾部市 宮津市

宮津は宮津市をはじめ岩滝町・伊根町等に勢力を張っているものの、その力はあまり強くない。

宮 津	40%	30%	20%	10%以下
	宮津市	岩滝町	伊根町	野田川町 舞鶴市 峰山町

加悦と野田川とはそれぞれ自分の町を勢力圏としているが、相互に関連した勢力圏を形づくっている。

中 心	80%	60%	10%	10%以下
加 悦	加悦町			野田川町
野田川		野田川町	加悦町	

峰山は峰山町を中心として網野町・大宮町・弥栄町その他に地歩を築き、奥丹後では一大中心となっている。

間人・溝谷・網野・久美浜・野中はそれぞれの属する町の内部に小さいながらまとまった勢力圏を構成する。この間隙を縫って兵庫県豊岡が網野町・久美浜町から峰山町にまで勢力を伸している。

峰 山	70%	40%	30%	10%以下
	峰山町	網野町	大宮町 弥栄町	丹後町 久美浜町

人 文 学 報

中 心	50%	40%	30%	20%	10%以下
間 人	丹後町				
溝 谷	弥栄町				峰山町
網 野		網野町			弥栄町
久 美 浜			久美浜町		
野 中				久美浜町	
豊 岡				網野町 久美浜町	峰山町

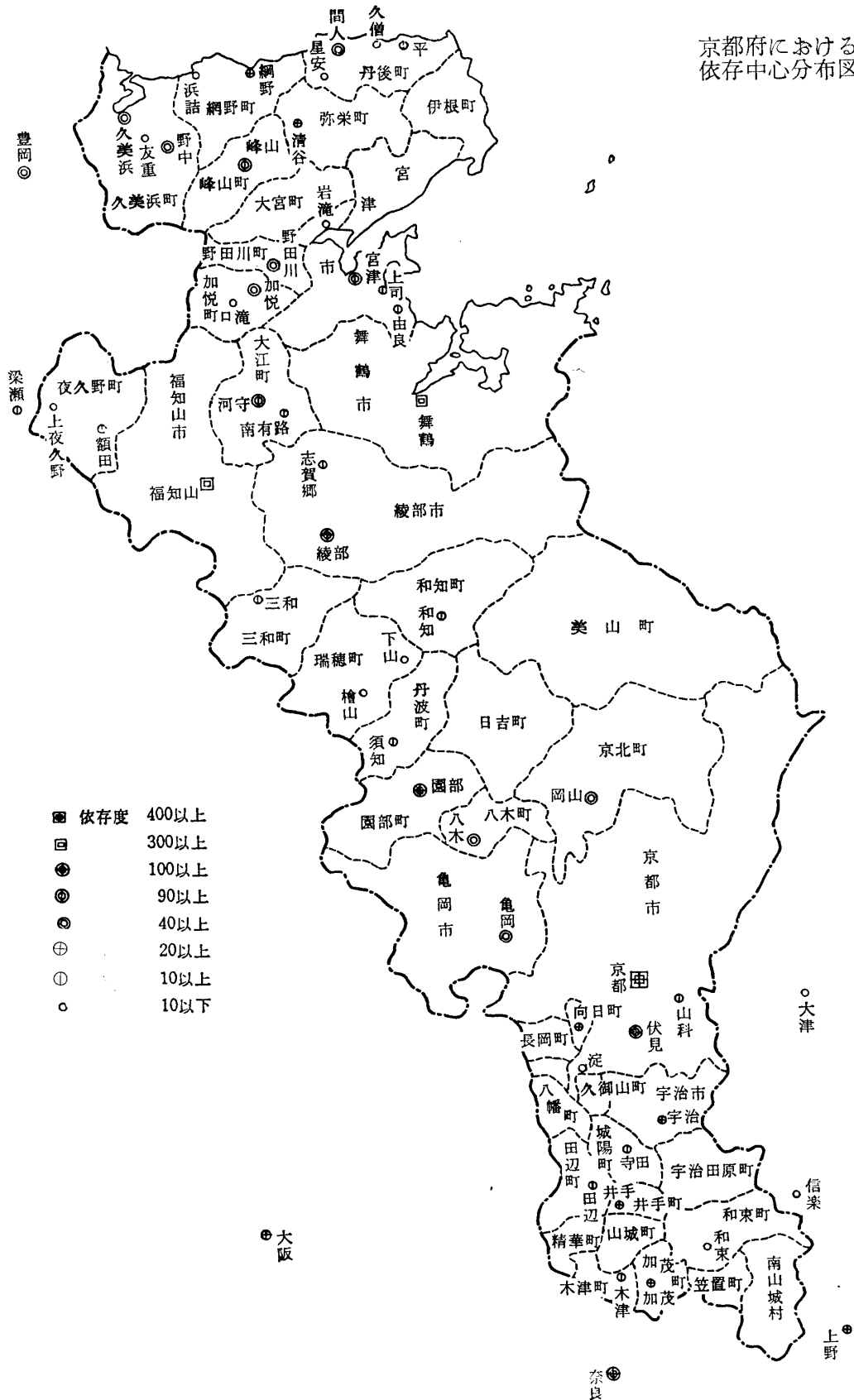
以上、各依存中心の勢力圏を個々について見て来たのであるが、ここで、これらの依存中心すなわち都市を、農村の依存する程度に応じて並べてみると次のごとくである。なお少なくとも2以上の農村部落の依存する中心のみに限定する。

順位	都市名	依存部落数	依存度総計	順位	都市名	依存部落数	依存度総計	順位	都市名	依存部落数	依存度総計
1.	京 都	114	470	19.	八 木	6	41	39.	平	3	10
2.	福知山	62	323	20.	溝 谷	7	32	40.	南有路	2	10
3.	舞 鶴	41	318	21.	上 野	6	32	41.	寺 田	3	10
	(東舞鶴	13	72	22.	大 阪	15	30	42.	浜 詰	3	9
	西舞鶴	18	114	23.	宇 治	6	30	43.	檜 山	2	9
4.	綾 部	34	187	24.	加 茂	6	28	44.	下 山	3	8
5.	伏 見	28	134	25.	井 手	7	26	45.	淀	2	8
6.	奈 良	30	134	26.	向日町	9	24	46.	岩 滝	2	8
7.	園 部	22	116	27.	網 野	6	24	47.	是 安	2	8
8.	宮 津	23	95	28.	三 和	3	19	48.	久 僧	3	7
9.	峰 山	21	94	29.	須 知	4	18	49.	和 束	3	6
10.	河 守	17	91	30.	志賀郷	3	18	50.	上夜久野	2	6
11.	間 人	10	60	31.	和 知	4	18	51.	友 重	2	6
12.	久美浜	11	56	32.	山 科	4	17	52.	口 滝	2	4
13.	周 山	11	55	33.	田 辺	4	16	53.	大 津	2	4
14.	豊 岡	18	49	34.	由 良	2	14	54.	信 楽	3	3
15.	野田川	8	46	35.	額 田	3	13				
16.	加 悦	7	45	36.	木 津	3	12				
17.	野 中	8	44	37.	上 司	2	12				
18.	亀 岡	8	43	38.	梁 瀬	5	11				

依存部落数114、依存度の値の合計が470に及ぶ京都は別格で、これにつづいて、依存度の計が300以上の福知山・舞鶴が傑出し、100以上の綾部・伏見・奈良・園部は主要な依存中心といえよう。また90以上の宮津・峰山・河守等もそれにつづ重要な中心である。此処に興味深いのは市のうちで、亀岡(18位)、宇治(23位)は農村の依存性は非常に弱い。これらはそれ自らの都市部の依存が大で、農村部の依存度が低いことを意味すると同時に、京都市という大都市の近郊に位置しているために、京都や伏見の大中心の陰にかくされてしまっていることをも意味するであろう。これらの依存中心を地図の上に示すと別図のごとくである。

京都府下農村の都市への依存関係

京都府における  
依存中心分布図



以上を概括すると次の通りである。京都という巨大な依存中心は京都市近郊は南山城から口丹波にかけての莫大な勢力圏を構成する。その間に伏見という下位の依存中心の勢力も見逃せない。京都や伏見の力の達しない南山城地区では奈良の力が伸びている。京都と並んで大なる依存中心をなすのは福知山と舞鶴とである。福知山は市外にまで勢力を伸し、綾部と競合しつつ、綾部を従属せしめる。舞鶴は舞鶴市内のみで独立した勢力圏を構成する。福知山と京都との中間には園部がある。丹後地区には宮津・峰山等の中位の勢力圏が見られるが、概していえば、自らの市町村内に自らの依存中心を見出して安住した形になっている。大中の依存中心と依存中心との谷間に集中して依存することのできない分散的な依存中心しか見出すことのできない町村が存在する。それらは例えば南山城地区では精華町、口丹波では京北町・美山町・瑞穂町であり、丹後地区では伊根町である。これらは地元部落への依存が大となる。終りに、市でありながら、農村の依存すべき中心の力の比較的弱いものに、宇治・亀岡がある。

#### IV 終りに

近時の農村は漸次封鎖的な独立コミュニティの性格を失って、開放的となり依存コミュニティの中に繰り込まれつつある。農村は都市と相互に依存し合ってより大なる社会圏を構成しつつある。この相互依存関係は生活のあらゆる面にわたっているのであるが、ここでは京都府の場合をとりあげ、単に農村から都市への一方的な依存関係を買物と観劇の面からのみとり上げて考察してみた。そしてその結果は単に依存する都市中心を析出し、その依存される度を並べただけに終わった。また、農村から都市への時間的距離と依存関係との関連、農村の側の都市依存度、また都市からの農村への依存関係というような一連の問題も未解決のままに終わった。更にまたこの調査は郵送法により各部落毎に回答を求めたので、どうしても精密性を欠き、回答回収にもかたよりが存在することも否定できない。このように今後によくの問題が残されていることを指摘して本稿を終りたい。